

平成 25 年度サバティカル研究者 ( B (一般) ) 研究成果報告書

平成 25 年 10 月 8 日

福岡教育大学長 殿

所属講座・センター 英語教育講座  
職 名 准教授  
氏 名 西村 美保

㊟

研究実施場所

レスター大学・英語科・ヴィクトリア朝研究センター

受入教員の職・氏名

教授・ジョアンヌ・シャトック

研究期間

平成 25 年 4 月 8 日 ～ 平成 25 年 9 月 25 日

研究題目

ヴィクトリア朝のカントリーハウスの使用人と移民使用人の研究

研究成果概要 (別紙のとおり)

## 研究成果概要

## ヴィクトリア朝のカントリーハウスの使用人と移民使用人の研究

西村 美保

本研究の研究成果の概要は以下のとおりである。

## 1. 研究の目的

本研究の目的はヴィクトリア朝の家庭奉公の多様な実態と文化的背景を浮き彫りにすることである。特に、その時期のカントリーハウスの使用人の特徴をその生活、衣服、文学表象に焦点を当て、吟味し、国内から国外へ使用人が移動した背景や流れについても、資料収集を行い、洞察を深める。

## 2. 研究の内容

イギリスの使用人はヴィクトリア朝時代に数の上で隆盛を極めたが、個々の使用人の生活は雇われる先の事情に左右され、多様であった。使用人の雇い主は質素な下宿を営む者から大邸宅の主まで、彼らの所属する階級と所得において、非常に幅広かった。また、19世紀後半には既にオーストラリアやカナダなどで使用人不足の問題が起こっていて、英国から移住した多くの独身女性が使用人として雇われた。本研究では、カントリーハウスの使用人の特徴をその生活、衣服、文学表象に焦点を当て、吟味する一方で、国内から国外へ使用人が移動した背景や流れについて資料収集を行い、洞察を深めた。

## 3. 研究の方法・進め方

本研究のテーマに関して、特に1860年代を中心として、ヴィクトリア朝の雑誌・新聞における使用人に関連した記事を探し、吟味した。女性向けのヴィクトリア朝の雑誌を複数調査しているうちに、*Good Words* という雑誌に連載された 'Mistress and Maid' という作品に遭遇し、その作品を精読し、使用人の表象を吟味した。著者の、*Dinah Mulock Craik* という女性作家に関する研究書、および、クレイク自身の女性観を綴ったエッセイも精読し、彼女の考え方がどのように作品に反映されているのか吟味した。

一方、複数のカントリーハウスとミュージアムを訪れ、学芸員の協力を得て、カントリーハウスの内部構造と使用人の生活および衣服について調査した。

## 4. 研究体制

レスター大学の図書館の地下には19世紀の新聞や雑誌が多数取り揃えてあり、アクセスしやすいので、便利だった。また、パソコンで横断的に新聞の検索をすることも可能だったので、効率が良かった。指導教授からは、特に、*Good Words* に連載された 'Mistress and Maid' を中心に指導を受けたが、大変熱心な指導教授で、読むべき資料についての指導が非常に的確で、効率よく研究を進めることができた。カントリーハウスとミュージアムにおける調査に関しては、学芸員の協力を得て、邸宅の内部構造と使用人の生活および衣服について、深く理解することができた。

## 5. 平成25年度実施による研究成果

日本国内では、19世紀のイギリスの新聞や雑誌類は、複数の大学に分散しており、しかも、ある一定の時期のものしかない場合もある。従って、レスター大学の図書館での調査は短い間に幅広く膨大な資料に目を通すことができたというだけでも、大変な収穫である。資料収集しただけで終わってしまい、これから吟味しないといけないものも多数あるが、使用人に関する歴史的資料がここまで出てくるとは予想できなかった。新聞、雑誌類のネットワークがイギリス国内の大学図書館の間でつながっているのは、効率よく資料収集できて、非常に助かった。

ヴィクトリア朝の女性向け雑誌を調査していて、*Good Words* という雑誌に連載された *Mistress and Maid* に遭遇したのは、非常に幸運なことだった。しかも、それはサバティカル開始からひと月経たないうちのことだった。日本では、あまり知られていないが、*Mistress and Maid* の著者、**Dinah Mulock Craik** は、当時はディケンズと同じくらい有名な作家であった。この作品で登場する女性使用人、エリザベスは、最初は郷里の中産階級の貧しい女性姉妹、リーフ姉妹の家で奉公をするが、女性姉妹とロンドンへ移ってから、しばらくして、姉妹の一人が嫁いだ先の大きな邸宅で雇われることになる。リーフ姉妹の家では、エリザベスはただ一人雇われた雑役女中であったが、次に雇われたアスコット邸では多数の使用人の一人となり、使用人と主人の関係性の違いに衝撃を受ける。リーフ姉妹の家では、エリザベスは姉妹と愛情と信頼に満ちた関係だったが、アスコット邸では使用人と主人は敵対関係であり、エリザベスは使用人同士の関係にも悩まされる。このように、*Mistress and Maid* はつつましい家庭とカントリーハウスの両方を一人の女性使用人が体験しているため、使用人をめぐる環境の違いが明確に示されている点で、非常に興味深い作品である。しかも、通常はガヴァネスの登場する小説を除いては、女性使用人はわき役として登場することが多い。*Mistress and Maid* では、リーフ姉妹の物語と並行して、エリザベス自身の物語も展開する。これまで、ディケンズやハーディの作品に登場する女主人と女性使用人の関係性を吟味してきたが、彼女たちの関係性は良好な場合、共依存の関係として描かれていることが多い。しかし、クレイクは、上記の作品で、優れた女主人と優れた女性使用人の理想的な関係性を描いている。それは、お互いに良い影響を与え合い、愛情で結ばれ、しかし、適度な距離を保ち、ある時期を境にそれぞれの道を歩むというものである。クレイク自身が女性観を綴ったエッセイ、*A Woman's Thoughts on Women* を読むと、クレイク自身、女性使用人に敬意を払いつつも、階級の違いを越えた対等性を実現させたいとは考えなかったことが分かる。しかし、女主人と女性使用人に共通するもの、すなわち、女性というものについて、クレイクは *Mistress and Maid* の中で強調し、社会の中で弱い存在である女性同士が仕事を与えたり、励ますなどして、助け合うの大切さを読者に訴えている。クレイクの語りは読者に直接的な呼びかけをして、共感を求めている。読者を巻き込んで、共感し合える女性の大きなグループを、構築しようと試みているように思われる。

使用人が複数雇われた邸宅の現地調査には、ノッティンガムのウォラトン・ホール、ダービーのケドルストン・ホール、ウルヴァハンプトンのワイトウィック・マーナー、グランサムのハーラクストン・マーナー、レクサムのエルディッヒなど数多くのカントリーハウスやタウンハウスを訪れた。カントリーハウスはウォラトン・ホールのように、現在では誰も住まず、ミュージアムとして機能し、結婚披露宴の会場として一部貸し出すようなところもあったり、ケドルストン・ホールやワイトウィック・マーナーのように、建物の一部に所有者が住み、残りの建物の管理をナショナル・トラストに任せているところもある。グランサムのハーラクストン・マーナーは、グレゴリー・グレゴリーという紳士が趣味で一生をかけて作り上げた大変凝った建物で、その内部の造りは圧巻であるが、現在ではアメリカのカレッジになっている。ハーラクストン・マーナーではカレッジの教授で、カントリーハウスの研究をして

いる研究者が案内をしてくださった。レクサムのエルディッヒは使用人の居住スペースを非常に多く一般に開放している。特に独特なのは、雇い主が使用人に送った詩や画家に使用人を描かせた絵が展示されているところである。ナショナル・トラストが管理を相談された時、エルディッヒはあまりにも荒れ果てていて、建物自体には興味がなかったようだが、家具と膨大な資料が残っていたために関心を示したと言う。エルディッヒでは、学芸員の協力を得て、使用人の衣類の撮影や、使用人の生活についての調査を進めることができた。

## 6. 今後の予想される成果及び展望

まずは、'Mistress and Maid'を中心として、ヴィクトリア朝の女性使用人についての論文執筆に取り組む予定である。この作品が発表された1860年代初頭に時代を絞って女性使用人が登場する新聞記事を分析して、文化的コンテクストを構築したい。また、これまで研究調査で訪れたカントリーハウスの歴史や内部の構造について、論文としてまとめておくのも面白いかもしれない。既に公開講座用に、パワーポイントは複数作成したので、12月の公開講座で、発表する予定である。イギリス国内の使用人の研究と比べると、移民使用人については、研究し始めて日が浅いこともあり、なかなか、はかどらないが、イギリスの美術館を回ると、複数の移民船の絵画が目についた。ディケンズの『デイヴィッド・コパフィールド』にも、元女性使用人が、身分違いの若者と駆け落ちして、堕ちた女のレッテルを貼られ、移民船に乗り込むシーンがある。移民船はすし詰め、難破の危険もある。危険を冒して外国へ行く決意をした女性たちの国内での暮らしぶりは決して良いものではなかったはずである。時間はかかるが、カナダやオーストラリアへ行った移民使用人について、今後も研究調査を続けていきたいと思う。